

夢の憂世の中宿の ―《頼政》の主題と趣向―

大阪大学教授 天野 文雄

主題の把握という点で、《頼政》はなかなかやつかない作品である。というのも、《頼政》はシテが頼政でありながら、頼政の亡霊によって後場で語られるのは、頼政自身のエピソードというより、頼政が活躍したわけでもない宇治橋の合戦であり、また宇治橋の合戦における平家方の足利又太郎忠綱の活躍だからである。もちろん、他の世阿弥の修羅能においては、《忠度》でも《実盛》でも《敦盛》でも、それぞれの主人公の最後が語られて、それによって、《忠度》では『千載集』に「読人知らず」とされたことへの執心が、《実盛》では老武者実盛の武士としての心意気が、《敦盛》では蓮生という「法の友」に出会うことができた喜びが二曲のテーマとして主張されているのだが、《頼政》にあつては、頼政自身のことあまり語られていず、そのために《頼政》という作品において、世阿弥が何を訴えようとしたのかがいまひとつ明確ではないのである。この点についての従来の理解は、たとえば、「老武者頼政の最後の奮戦ぶりを扱った能だが、その心根を描くというよりも、合戦のさまの描写に重点が置かれ、敵方の忠綱の方がかえって生き生きし

ている」(岩波『謡曲集』)とか、「『平家物語』巻四「橋合戦・宮御最期」に拠りつつ文武に名が高かった頼政の最期の奮戦ぶりを描く。頼政の心根を描くよりも合戦のさまの描写に重点が置かれ、敵方の忠綱の活躍が生き生きと描かれている」(『能・狂言事典』)などというもので、いずれも頼政より敵方の足利又太郎忠綱の活躍が特記されている。《頼政》におけるこのような特色は、すでに昭和初年の『謡曲大観』でも注意されていて、そこでは、《頼政》は凡作ではないとしながらも、「後段では、クセと語と二節続けて、官軍の様を餘りにも委しく語ってある」ことを、「脚色がやゝ冗漫に流れた嫌ひがある」としている。このように、《頼政》はその「ねらい」がいまひとつ把握しにくい作品なのであるが、そうしたなかにあつて、その「ねらい」の核心に迫っていると筆者が思う指摘が管見では二つある。その一つは新潮日本古典集成『謡曲集』の指摘で、ここでは、終曲近くで頼政の亡霊によって紹介される頼政の辞世「埋もれ木の花咲くこともなかりしに身のなる果てはあはれなりけり」を《頼政》の「主題歌」とみて、「老武者の功成り得ずに戦死し

た悲しみを主題とするのが《頼政》の意図」としている。もう一つは相良亨氏の『世阿弥の宇宙』（平成二年、ペリかん社）の指摘で、そこでは、やはり頼政の辞世の「あはれなりけり」に着目し、これを頼政の自己把握ととらえ、さらに舞台となつている中宿（京と奈良の中間の意）たる宇治がこの世とあの世のあいだの中有的な空間と設定されているとしたうえで、「あわれな存在があわれな空間に存在する」ところに、この曲の基調があるのではなからうか」と総括している。

このうちでも、筆者はとりわけ後者の相良氏の指摘が《頼政》の主題把握としてほぼ正鵠を射ているのではないかと思う。相良氏が着目した辞世の「あはれ」は「はかない」というほどの意味と思われるが、ここで筆者が注意を喚起したいのは、そのような末期に際会しての頼政の感慨―相良氏の言葉で言えば自己把握―は、《頼政》においては、たんに不遇だった自身の生涯にたいする感慨というだけでなく、彼自身が七十年あまり過ごしてきたこの世自体が、前世と来世との中間に位置する「あはれ」な時空であることにたいする感慨となつていることであろう。そのような、現世を「あはれ」なものとする頼政の認識―それは当然作者世阿弥の認識でもある―は、舞台を「中宿」としての宇治に設定して、その「中宿」に現世が「中宿」であることを重ねるといふ趣向によつて、《頼政》一曲の主題として明確にうち出されているとしてよいであろう。その

ような《頼政》一曲の「ねらい」を象徴しているのが、中入り前の「夢の憂き世の中宿」であろう。そこには、この世が夢のようにではなく、かつ憂きことばかりであるとする、《頼政》一曲の主題が集約されていると思われる。《頼政》は基本的にはこのように理解されるべき作品だと思ふのであるが、それをいっそう補強する文句が、頼政が自害して果てた扇の芝の前での頼政の化身（前ジテ）と僧のやりとりのなかにある。すなわち、その場面の詞章は、

ワキ「痛はしやさしも文武に名を得し人なれども、あとは草露の道の辺となつて、行人征馬のゆくえのことし、あら痛はしや候シテ」
なう宮軍の月も日も今日にあたりて候

ワキ「何と宮軍の月も日も今日にあたりたると候ふや

シテ「申すにつけて我ながら、よそにはあらず旅人の、草の枕の露の世に、姿見えんと未たりたり、うつとな思ひ給ひそとよ

というものが（原形と思われる下掛りのテキストによる）、ここで注目すべきは傍線を付した箇所「旅人」である。この「旅人」は従来はワキ僧のことと解されていて、このあたりはたとえば、「このようにお話してゐると、自分ながら他人事と思はれなくなつて来ました。実は旅の方の仮寝の夢に姿を見せようと思つて来たのです。これを現と思ひになつてはいけませんよ」（『謡曲大観』などと訳されているのであるが、この「旅人」は僧だけではなく、僧と頼政の化身の両者を意味して

いるのではないかと思う。そこで、そのような視点からここを現代語に改めてみると、「私はその宮軍と無関係の人間ではありません。私は前世から来世へ向かう旅人ですが、その途中に草露のようにはないこの世に立ち寄り、同じ旅人であるお僧に夢のなかでわが姿をお見せしようと思って、こうしてやつてきたのです。これを現実のこととお思ひになつてはいけませんよ」となるかと思う。私解はすなわち、「旅人」が頼政の化身と僧の二人を意味するものとみ、さらに、「姿見えんと来たりたり」に前世からの旅人である頼政がこの世に立ち寄つたという意と、後刻、僧の夢中に現われようというシテの予告という二つの意味がこめられている、とこの箇所を重層的にとらえようとするものであるが、「草の枕の露の世に、姿見えんと来たりたり」は右の私訳のように、「草露のようにはないこの世に立ち寄り…」と訳すしかない文句であり、その点からも「旅人」が前世から来世へと向かう旅人である頼政をも意味していることは、まず確実と思う。そう考えてよいならば、この箇所は、さきに筆者がいささか敷衍して紹介した相良亨氏の《頼政》理解とも合致し、それをさらに補強する材料ということになる。

さきに《頼政》の主題を象徴する文句として紹介した「夢の憂き世の中宿の」（地謡の担当）は、右の「よそにはあらず旅人の」の直後の文句であるが、このように、《頼政》では前場の

最後の場面主題をストリートにうちだしている。それをうけて、約束通り後場に登場してきた頼政の亡霊は、「うたかたの、あはれはかなき世の中に、蝸牛の角の争ひも、はかなかりける心かな」とこの世の「はかなさ（あはれ）」を宣言し、その具体例として、みずからの体験一高倉宮の擁立と宇治平等院での敗死一を語るのであるが、その物語は「埋れ木の花咲くこともなかりしに身のなる果てはあはれなりけり」という、まさに「主題歌」といつてよい辞世で締めくくられる。

こうして、《頼政》一曲は、頼政個人の「あはれ」を通じて、この世の「あはれ」が主題としてうちだされているのだが、「中宿」宇治はそのような主題をもった作品の舞台として、まことに恰好の場といえよう。宇治はもちろん頼政敗死の場所であり、頼政を主人公にした夢幻能を制作するとしたら、その舞台は宇治以外にはないと思われるが、その宇治をはかない現世を象徴する場として、たくみに「この世のあはれ」という主題に結びつけたのが世阿弥なのである。前場で名所としての宇治がたっぷりと描かれているのも、そうした世阿弥の「ねらい」と深くかかわっていることは、もはやいいうまでもあるまい。